## 付録 K 干渉計の出力粒子数揺らぎと位相感度

## K.1 干渉計の出力粒子数の揺らぎ

光干渉計であれ原子波干渉計であれ,干渉計の出力ポートで観測される粒子数nが干渉 計の出力信号に対応する.そして,一般に観測される粒子数には揺らぎ  $\Delta n$  が伴う.ここで は,入力状態が 粒子数状態(フォック状態), コヒーレント状態の二つの場合について, この  $\Delta n$ を求める.その際,入力状態が時間発展するシュレーディンガー表示よりも,演算 子が時間発展するハイゼンベルグ表示の方が便利である.そこで,まず図 K.1(a)のような 透過率 T のビームスプリッターの動作をハイゼンベルグ表示で考える.ビームスプリッタ ーの入力 ポート a, b の消滅演算子を  $\hat{a}, \hat{b}$  とし,これらはボソンの交換関係  $[\hat{a}, \hat{a}^{\dagger}] = [\hat{b}, \hat{b}^{\dagger}] = 1$ を満たすものとする.ここで考える粒子は,ボゾンであれば光子でも原 子でもよい.出力ポートc, dのハイゼンベルグ表示における消滅演算子 $\hat{c}, \hat{d}$  は,粒子間相 互作用がなければ入力ポートの消滅演算子 $\hat{a}, \hat{b}$ と以下の線形関係で結ばれる:

$$\begin{pmatrix} \hat{c} \\ \hat{d} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sqrt{T} & -\sqrt{1-T} \\ \sqrt{1-T} & \sqrt{T} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \hat{a} \\ \hat{b} \end{pmatrix} .$$
 (K.1)

## 実際, $\hat{c},\hat{d}$ はボゾンの交換関係を満足している:

$$[\hat{c}, \hat{c}^{\dagger}] = [\sqrt{T}\hat{a} - \sqrt{1 - T}\hat{b}, \sqrt{T}\hat{a}^{\dagger} - \sqrt{1 - T}\hat{b}^{\dagger}] = T[\hat{a}, \hat{a}^{\dagger}] + (1 - T)[\hat{b}, \hat{b}^{\dagger}] = 1$$
(K.2)

$$[\hat{d}, \hat{d}^{\dagger}] = [\sqrt{1-T}\hat{a} + \sqrt{T}\hat{b}, \sqrt{1-T}\hat{a}^{\dagger} + \sqrt{T}\hat{b}^{\dagger}] = (1-T)[\hat{a}, \hat{a}^{\dagger}] + T[\hat{b}, \hat{b}^{\dagger}] = 1 .$$
 (K.3)



図 K.1 (a) 演算子によるビームスプリッターの定式化.出力ポートの消滅演算子 $\hat{c},\hat{d}$ は, 入力ポートの演算子 $\hat{a},\hat{b}$ と線形関係(K.1)で結ばれる.(b) マッハ・ツェンダー干渉計も, ビームスプリッターと同様に入出力ポートの消滅演算子を定義できる.

また,各ポートの粒子数演算子を $\hat{n}_x \equiv \hat{x}^{\dagger}\hat{x}$ (x = a, b, c, d)とし,出力ポートの粒子数の 期待値を計算すると,

$$< \hat{n}_{c} > = < (\sqrt{T}\hat{a}^{\dagger} - \sqrt{1 - T}\hat{b}^{\dagger})(\sqrt{T}\hat{a} - \sqrt{1 - T}\hat{b}) >$$

$$= T < \hat{n}_{a} > -\sqrt{T(1 - T)}(\hat{a}^{\dagger}\hat{b} + \hat{b}^{\dagger}\hat{a}) + (1 - T) < \hat{n}_{b} >$$
(K.4)

$$\begin{aligned} <\hat{n}_{d}> &= <(\sqrt{1-T}\,\hat{a}^{\dagger} + \sqrt{T}\,\hat{b}^{\dagger})(\sqrt{1-T}\,\hat{a} + \sqrt{T}\,\hat{b})> \\ &= (1-T) <\hat{n}_{a}> + \sqrt{T}(1-T)(\hat{a}^{\dagger}\hat{b} + \hat{b}^{\dagger}\hat{a}) + T < \hat{n}_{b}> \end{aligned} \tag{K.5}$$

となり,入力粒子数と出力粒子数の間には粒子数保存則

$$<\hat{n}_{a}>+<\hat{n}_{b}>=<\hat{n}_{c}>+<\hat{n}_{d}>$$
 (K.6)

が成立している.

上記の定式化は,そのまま図 K.1(b)のマッハ・ツェンダー干渉計に拡張できる.ビーム スプリッターの場合と同様に入力ポートの消滅演算子を $\hat{a}, \hat{b}$ ,出力ポートの消滅演算子を $\hat{c}, \hat{d}$ とすると,これらの間には以下の関係式が成立する:

$$\begin{pmatrix} \hat{c} \\ \hat{d} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t & -r \\ r & t \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \hat{a} \\ \hat{b} \end{pmatrix}$$
 (K.7)

ただし,

$$t = -\frac{1+e^{i\varphi}}{2}, r = -\frac{1-e^{i\varphi}}{2}$$
 (K.8)

この干渉計は,位相差 $\varphi$ に依存する透過率 $|t|^2 (=1-|r|^2)$ を持つビームスプリッターとみなすことができる.実際(K.7)で定義した $\hat{c}, \hat{d}$ はボゾンの交換関係を満たし, $|t|^2+|r|^2=1$ より粒子数保存則(K.6)も成立する.

ここで,干渉計の出力ポートcで観測される粒子数の期待値< $\hat{n}_c$ >を計算すると,

$$<\hat{n}_{c}> = <\hat{c}^{\dagger}\hat{c}> = <(t\hat{a}-r\hat{b})(t^{*}\hat{a}^{\dagger}-r^{*}\hat{b}^{\dagger})>$$
  
=  $|t|^{2} <\hat{n}_{a}> + |r|^{2} <\hat{n}_{b}> - < tr^{*}\hat{a}\hat{b}^{\dagger}+t^{*}r\hat{a}^{\dagger}\hat{b}>$  (K.9)

となる.特に,入力ポートbが真空状態  $|0>_b$ の場合, $\hat{b}|0>_b=0$ , $\hat{b}^{\dagger}|0>_b=|1>_b$ より式 (K.9)の右辺第2項および3項はゼロになり,

$$<\hat{n}_{c}>=|t|^{2}<\hat{n}_{a}>=<\hat{n}_{a}>\frac{1+\cos{\varphi}}{2}$$
 (K.10)

となる.これが干渉計の出力信号となる.

次に,干渉計の出力ポート*c* で観測される粒子数の揺らぎ<  $\Delta n_c >$ を考える.ここでは 各ポートの粒子数揺らぎ<  $\Delta n_x >$ を粒子数の分散<  $(\Delta n_x)^2 > =< \hat{n}_x^2 > -< \hat{n}_x >^2$ の平方根 で定義する(つまり<  $\Delta n_x >^2 =< (\Delta n_x)^2 >$ ).出力ポート*d* の粒子数の分散<  $(\Delta n_c)^2 >$ を, 入力ポート*b* が真空状態の場合について計算すると以下のようになる:

$$< (\Delta n_c)^2 > = < \hat{c}^{\dagger} \hat{c} \hat{c}^{\dagger} \hat{c} > - < \hat{c}^{\dagger} \hat{c} >^2$$

$$= < \hat{c}^{\dagger} (\hat{c}^{\dagger} \hat{c} + 1) \hat{c} > - |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} >^2$$

$$= < \hat{c}^{\dagger} \hat{c}^{\dagger} \hat{c} \hat{c} > + < \hat{c}^{\dagger} \hat{c} > - |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} >^2$$

$$= |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a}^{\dagger} \hat{a} \hat{a} > + |t|^2 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} > - |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} >^2$$

$$= |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} (\hat{a} \hat{a}^{\dagger} - 1) \hat{a} > + |t|^2 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} > - |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} >^2$$

$$= |t|^4 (< \hat{a}^{\dagger} \hat{a} \hat{a}^{\dagger} \hat{a} > - < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} >^2 ) + |t|^2 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} > - |t|^4 < \hat{a}^{\dagger} \hat{a} > 2$$

$$= |t|^4 < (\Delta n_a)^2 > + |t|^2 |r|^2 < \hat{n}_a > .$$

$$(K.11)$$

この結果を用いて,入力ポート*a*の状態が 粒子数状態, コヒーレント状態の二つの場合 について出力ポート*c*の粒子数の分散および揺らぎを具体的に計算すると,

粒子数状態 | N ><sub>a</sub> の場合  
< 
$$\hat{n}_a \ge N$$
, <  $(\Delta n_a)^2 \ge < \hat{n}_a^2 \ge - < \hat{n}_a \ge N^2 - N^2 = 0$ より,  
<  $(\Delta n_c)^2 \ge 0 + |t|^2 |r|^2 N = |r|^2 < \hat{n}_c \ge \frac{N}{4} \sin^2 \varphi$  (K.12)  
<  $\Delta n_c \ge |r| \sqrt{} = \frac{\sqrt{N}}{2} |\sin \varphi|$ . (K.13)

コヒーレント状態 | 
$$\alpha >_a$$
の場合  
<  $\hat{n}_a >= |\alpha|^2$ , <  $(\Delta n_a)^2 >= < \hat{n}_a^2 > - < \hat{n}_a >^2 = (|\alpha|^4 + |\alpha|^2) - |\alpha|^4 = |\alpha|^2$ より

$$<(\Delta n_{c})^{2} >= |t|^{4} |\alpha|^{2} + |t|^{2} |r|^{2} |\alpha|^{2} = |t|^{2} |\alpha|^{2} = <\hat{n}_{c} >$$
(K.14)

$$<\Delta n_c>=\sqrt{<\hat{n}_c>}=\left|\cos\frac{\varphi}{2}\right||\alpha|$$
 (K.15)

このように,出力の平均値に対する揺らぎの比<  $\Delta n > / < n >$ は,入力が粒子数状態でもコ ヒーレント状態でも $1/\sqrt{<n>}$ に比例する.粒子数の分散が平均値に等しくなるような揺ら ぎ(<( $\Delta n$ )<sup>2</sup>>=< n>)は一般に**ショット雑音**と呼ばれるが,入力がショット雑音を持つコヒ ーレント状態の場合,出力もショット雑音を持つことが式(K.14)からわかる.一方,粒 子数揺らぎがゼロである粒子数状態が入力の場合は,式(K.12)より<( $\Delta n$ )<sup>2</sup>>=|r|<sup>2</sup><n>( $0 \le |r|^2 \le 1$ )であるので,ショット雑音以下の出力が得られる.

## K.2 干渉計の位相感度

干渉計の位相感度を,干渉計が識別し得る最小の位相差 Δφと定義する.干渉計の出力 としてポート c を用いるとすると,Δφは以下のような式で表現できる:

$$\Delta \varphi = \left| \frac{\partial \varphi}{\partial \langle \hat{n}_c \rangle} \right| \langle \Delta n_c \rangle = \left| \frac{\partial \langle \hat{n}_c \rangle}{\partial \varphi} \right|^{-1} \langle \Delta n_c \rangle \quad . \tag{K.16}$$

式 (K.10) より 
$$\frac{\partial < \hat{n}_c >}{\partial \varphi} = <\hat{n}_a > \frac{\partial}{\partial \varphi} \frac{1 + \cos \varphi}{2} = -\frac{<\hat{n}_a >}{2} \sin \varphi$$
 であるので,式(K.16)は  

$$\Delta \varphi = \frac{2 < \Delta n_c >}{<\hat{n}_a > |\sin \varphi|}$$
(K.17)

と表せる.入力が粒子数状態 |  $N >_a$ の場合は,式(K.13)より

$$\Delta \varphi = \frac{1}{\sqrt{N}} \tag{K.18}$$

となり, 位相感度は $\varphi$ の値に依らない. 一方, 入力がコヒーレント状態 $|\alpha>_a$ の場合は, 式 (K.15)より

$$\Delta \varphi = \frac{1}{|\alpha| |\sin(\varphi/2)|}$$
(K.19)

となり, 位相感度は $\varphi$ に依存する.